

第2問

次の文章は、江國香織えくにくの小説「デューク」の全文である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

歩きながら、私は涙がとまらなかつた。二十一にもなつた女が、びよびよお泣きながら歩いているのだから、他の人たちがいぶかしげに私を見たのも、無理のないことだつた。それでも、私は泣きやむことができなかつた。

デュークが死んだ。

私のデュークが死んでしまつた。

私は悲しみでいっぱいだつた。

デュークは、グレーの目をしたクリーム色のムク毛の犬で、プーリー種という牧羊犬だつた。わが家にやつてきた時には、まだ生まれたばかりの赤んぼうで、廊下を走ると手足がすべつてぺたんとはひらき、すーっとお腹なかですべつてしまつた。それがかわいくて、名前を呼んでは何度も廊下を走らせた。(そのかつこうがモップに似ていると言つて、みんなで笑つた。)たまご料理と、アイスクリームと、梨なしが大好物だつた。五月生まれのせいか、デュークは初夏がよく似合つた。新緑のころに散歩につれていくと、匂におやかな風に、毛をそよがせて目をほそめる。すぐにすねるたちで、すねた横顔はジエームス・ディーン(注1)に似ていた。音楽が好きで、私がピアノをひくと、いつもうづくまって聴いていた。そうして、デュークはとても、キスがうまかつた。

死因は老衰で、私がアルバイトから帰ると、まだかすかにあたたかかつた。ひざに頭をのせてなでているうちに、いつのまにか固くなつて、つめたくなつてしまつた。デュークが死んだ。

次の日も、私はアルバイトに行かなければならなかつた。玄関で、みように明るい声で「行ってきます」を言い、表にでてドアをしめたとたんに涙があふれたのだつた。泣けて、泣けて、泣きながら駅まで歩き、泣きながら改札口で定期を見せて、泣きながらホームに立つて、泣きながら電車に乗つた。電車はいつものとおり混まんでいて、かばんをかかえた女学生や、似たようなコートを着たおつとめ人たちが、ひっきりなしにしゃくりあげている私を遠慮会釈なくじろじろ見つめた。

「じつぞ」

無愛想にぼそつと言つて、男の子が席をゆずってくれた。十九歳くらいだろうか、白いポロシャツに紺のセーターを着た、ハンサムな少年だった。

「ありがとう」

(1) 蚊のなくような涙声でようやく一言お礼を言つて、私は座席にこしかけた。少年は私の前に立ち、私の泣き顔をじつと見ている。深い目の色だった。私は少年の視線にすくめられて、なんだか動けないような気がした。そして、いつのまにか泣きやんでいた。

私のおりた駅で少年もおり、私の乗りかえた電車に少年も乗り、終点の渋谷までずっといっしょだった。どうしたの、とも、だいじょうぶ、とも聞かなかつたけれど、少年はずっと私のそばにいて、満員電車の雑踏から、さりげなく私をかばってくれていた。少しづつ、私は気持ちがおちついてきた。

「コーヒーごちそうさせて」

電車からおりると、私は少年に言った。

十二月の街は、あわただしく人が往き来し、からっ風がふいていた。クリスマスまでまだ二週間もあるのに、あちこちにツリーや天使がかざられ、ビルには歳末大売り出しのたれまがかかっていた。喫茶店に入ると、少年はメニューをちらっと見て、

「朝ごはん、まだなんだ。オムレツもたのんでいい」

ときいた。私が、どうぞ、とこたえると、うれしそうにこつと笑った。

公衆電話からアルバイト先に電話をして、A 風邪をひいたので休ませていただきます、と言つたのを聞いていたとみえて、私がテーブルにもどると、

「じゃあ、きょうは一日ひまなんだ」

少年はぶっきらぼうに言った。

喫茶店をでると、私たちは坂をのぼった。坂の上がいいところがある、と少年が言ったのだ。

「こい」

B 彼が指さしたのは、プールだった。

「じょうだんじゃないわ。この寒いのに」

「温水だから平気だよ」

「水着持っていないもの」

「買えばいい」

自慢ではないけれど、私は泳げない。

「いやよ、プールなんて」

「泳げないの」

少年がさもおかしそうな目をしたので、私はしゃくになり、だまっただま財布から三百円出して、入場券を買ってしまった。

十二月の、しかも朝っぱらからプールに入るような(ウ)酔狂は、私たちのほか誰だもいなかった。おかげで、そのひろびろとしたプールを二人で独占してしまえた。少年はきびきびと準備体操をすませて、しなやかに水にとびこんだ。彼は、魚のようにじょうずに泳いだ。プールの人工的な青も、カルキの匂いも、反響する水音も、私にはとてもなつかしかった。プールなど、いったい何年ぶりだろう。ゆっくり水に入ると、からだがゆらゆらして見える。

とつぜんぐんぐんと前にひっぱられ、ほとんどころぶようにうつぶせになって、私は前に進んでいた。まるで、誰かが私の頭を糸でひっぱってでもいるように、私はどんだん泳いでいた。すっと、糸をひく力が弱まった。あわてて立ちあがって顔をふくと、もうプールのまんなかだった。三メートルほど先に少年が立っていて、私の顔を見てにっこり笑った。私は、泳ぐって、気持ちのいいことだったんだな、と思った。

少年も私も、ひとことも言わずに泳ぎまわり、少年が、

「あがるうか」

と言った時には、壁の時計はお昼をさしていた。

プールをでると、私たちはアイスクリームを買って、食べながら歩いた。泳いだあとの疲れもこちよく、アイスクリームのあまさは、舌にうれしかった。このあたりは、少し歩くと閑静な住宅地で、駅のまわりの喧騒けんそうがうそのようだった。私の横を歩いている少年は背が高く、端正な顔立ちで、私は思わずドキドキしてしまった。晴れたま昼の、冬の匂いがした。

地下鉄に乗って、私たちは銀座にでた。今度は私が、「いいところ」を教えてあげる番だった。裏通りを十五分も歩くと、小さな美術館がある。めだたないけれどこぢんまりとした、いい美術館だった。私たちはそこで、まず中世イタリアの宗教画を見た。それから、古いインドの細密画(注3)を見た。一枚一枚、たんねんに見た。

「これ、好きだなあ」

少年がそう言ったのは、くすんだ緑色の、象と木ばかりをモチーフにした細密画だった。

「古代インドはいつも初夏だったような気がする」

「ロマンチストなのね」

私が言うと、少年はてれたように笑った。

美術館をでて、私たちは落語を聴きにいった。たまたま演芸場の前を通って、少年が落語を好きだと言ったからなのだが、いざ中に入ると、私はだんだんゆううつになってしまった。

デュークも、落語が好きだったのだ。夜中に目がさめて下におりた時、消したはずのテレビがついていて、デュークがちよこんとすわって落語を見ていた。父も、母も、妹も信じなかったけれど、ほんとうに見ていたのだ。

デュークが死んで、悲しくて、息もできないほどだったのに、知らない男の子とお茶をのんで、プールに行つて、散歩をして、美術館をみて、落語を聴いて、私はいったい何をしているのだろう。

だしものは、「大工しらべ」だった。少年は時々、おもしろそうにくすくす笑ったけれど、私はけっきょく一度も笑えなかった。それどころか、だんだん心が重くなり、落語が終わって、大通りまで歩いたころには、もうすっかり、悲しみがもどってき

ていた。

C デュークはもういない。

デュークがいなくなりました。

大通りにはクリスマスソングが流れ、うす青い夕暮れに、ネオンがぼつぼつつきはじめていた。

「今年ももう終わるなあ」

少年が言った。

「そうね」

「来年はまた新しい年だね」

「そうね」

「今まですつと、僕は楽しかったよ」

「そう。私もよ」

下をむいたまま私が言うと、少年は私のあごをそつともちあげた。

「今まですつと、だよ」

なつかしい、深い目が私を見つめた。そして、少年は私にキスをした。

私があんなにおどろいたのは、彼がキスをしたからではなく、彼のキスがあまりにもデュークのキスに似ていたからだった。ぼうぜんとして声もだせずにいる私に、少年が言った。

「僕もとても、愛していたよ」

淋しさびしそうに笑った顔が、ジェームス・ディーンによく似ていた。

D それだけ言いに来たんだ。じゃあね。二気ニキで」

そう言うつと、青信号の点滅している横断歩道にすばやくとびだし、少年は駆けていってしまった。

私はそこに立ちつくし、いつまでもクリスマスソングを聴いていた。銀座に、ゆっくりと夜がはじまっていた。

(注) 1 ジェームス・ディーン——アメリカの映画俳優(一九三二—一九五五)。

2 カルキ——「クロルカルキ」の略。水の消毒などに用いる薬剤。

3 細密画——細かい描写で精密に対象を描いた絵。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

(ア) いぶかしげに

- 12
- ⑤ 珍しそうに  
④ 気味悪そうに  
③ 迷惑そうに  
② 気の毒そうに  
① 不審そうに

(イ) 蚊のなくような

- 13
- ⑤ 弱々しい  
④ かすれきった  
③ 耳障りな  
② 一本調子の  
① 悲しげな

(ウ) 酔狂

- 14
- ⑤ お調子者  
④ 目立ちたがりや  
③ あまのじゃく  
② 物好き  
① 怠け者

問2 傍線部A「風邪をひいたので休ませていただきます」とあるが、アルバイトを休むに至った「私」の気持ちの変化はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 責任感からアルバイトに行こうとしたが、一人になった途端にどうしてよいのかわからなくなった。しかし、「少年」の親切によって悲しみが薄まり、彼にお礼をすることがアルバイトに行くより大事なことだと思うようになった。
- ② 悲しんでばかりもいられないと思いアルバイトに出かけたが、どうしても悲しみに堪え切れなかった。しかし、「少年」の優しさにふれるうちに、彼をデュークの代わりとして愛することで悲しみから逃れられると思うようになった。
- ③ デュークの死に取り乱してしまい、アルバイトを休む口実も思いつかないほど悲しい感情ばかりが心の中を支配していた。しかし、「少年」のさりげない親切のおかげで余裕を取り戻し、風邪で休むことにしようと思うようになった。
- ④ アルバイトで楽しいことを見つけて気を紛らそうとしたが、涙が止まらず途方に暮れていた。しかし、ハンサムで優しい「少年」の愛情に接して悲しみも癒え、これから始まる新しい恋に期待してみようと思うようになった。
- ⑤ アルバイトに行こうと強がって家を出たが、一人になると悲しみを抑え切れなくなった。しかし、「少年」の思いやりのある態度のおかげで悲しみが幾分か薄まったので、このまま彼と一緒に過ごしたいと思うようになった。



問 3

傍線部 B「彼が指さしたのは、プールだった」とあるが、これに続くプールでの出来事の叙述は、この小説の中でどのような働きをしているか。その説明として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 強引な「少年」に反発を感じていた「私」が、「少年」の指導によって泳ぐことを教えられるということで、「少年」が「私」にとって不可欠な存在となることを表している。
- ② 泳ぎの嫌いな「私」が、「少年」に導かれてプールで童心に帰る体験をさせられるということで、「私」が純真さを取り戻すことを暗示している。
- ③ 悲しみに沈んでいた「私」が、忘れていた水の感覚の素晴らしさを「少年」に教えられるということで、「私」が悲しみを癒やす方法を手に入れたことを表している。
- ④ 泳げないはずの「私」が、「少年」の神秘的な力によって泳ぐことの快さを体験させられるということで、「少年」が特別な存在であることを暗示している。
- ⑤ 元気をなくしていた「私」が、「少年」によって泳ぐことを擬似的に経験させられるということで、「少年」の存在の不確かさを表している。

問4 傍線部C「デュークはもういない。デュークがいなくなってしまった」とあるが、この箇所が示している「私」の心理状態は

どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 「少年」と一緒にいながら、自分の中の喪失感をあらためて意識している。
- ② デュークの死後、何をしても気持ちが晴れないまま、変わらぬ悲しみに浸り続けている。
- ③ 楽しい思いをすればするほど、悲しみにそぐわない場所にいる自分に対して腹立たしく思っている。
- ④ 親切的な「少年」の気持ちを大事にしようとする努力のために、結局心が通い合わずいらだっている。
- ⑤ 心の中で無理に叫ぶことで、デュークとの決別を前向きに受け入れようとしている。

問5 傍線部D「それだけ言いに来たんだ。じゃあね。元気で」とあるが、この発言から読みとれる「少年」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 「私」を慰め切れなかったことを悔やみながらも、一日つきあってくれたことに感謝する気持ち。
- ② 最後にまたふさぎこんでしまった「私」に対して、あきらめかけながらも励まそうとする優しい気持ち。
- ③ 「私」とともに過ごした幸福な歳月を懐かしみ、「私」の深い悲しみにこたえようとする惜別の気持ち。
- ④ 「とっておきの場所」を教え合っ心を通じたことを喜び、また「私」に会えるだろうという期待の気持ち。
- ⑤ 一日のデートを通して二人の思い出をたどったことで、「私」への愛着を断ち切ろうとするあきらめの気持ち。

問6 次の a ～ g のうち、この小説における表現や手法の効果についての説明として、適当なものの組合せはどれか。後の

① ～ ⑦ のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

a 別れの時を夕暮れという境界の時間に設定していることで、少年との一日のデートの終わりと、愛犬との永遠の別れとが幻想的に重ね合わされている。

b 「少年」の行動や面影にデュークの思い出を何度も重ね合わせて、「少年」がデュークの化身であるかのような感覚を読者に与え、不可思議な幻想の世界を見せることで、一日の出来事が「私」の夢であったことを表している。

c 「少年」と行動をとにもするうちに、現実にはありそうもない経験を重ねることによって、幻想の中に救いを求めるようになっていく「私」の意識の内側を読者に印象深く示している。

d 「私」の混乱した心情を際立たせるために、同じ言葉を反復使用することは、一見稚拙な表現のようだが読者の心に強く印象付けられるという効果がある。

e 年の瀬のあわただしい時期に愛犬の死を設定することで、ひっそりと死んでいった愛犬に対する「私」の痛切な気持ちが強調され、クリスマス前という時間設定が、新たな恋の始まりを効果的に示唆している。

f 「少年」とのデートの中にデュークの好きだったものを散りばめることで、デュークとの交流を「私」が無意識のうちに再び体験していることを読者に示している。

g 同じ言葉の繰り返しや登場人物の行動の克明な描写は、サスペンス映画のように一つ一つのシーンを読者に印象付けるという効果をもち、物語の展開をスリリングにしている。

① a | b | e

② a | c | f

③ a | d | f

④ b | d | e

⑤ b | e | g

⑥ c | d | e

⑦ c | f | g